



収蔵品を持たない施設における収蔵品管理システム

博物館の収蔵資料データベースに用いられるシステム。大量の資料を管理するために、高度な検索機能やデータの一括登録機能、業務で使用するための出力機能、一般に情報を発信するための公開機能が搭載されています。博物館における情報共有や情報の保管・継承、および業務の効率化や情報公開に貢献しています。

施設ごとに対象となる資料の性質、業務の流れが異なる博物館では、それぞれの館向けにカスタマイズすることが一般的です。そうしたカスタマイズの事例には、収蔵品に関係ない機能も少なくありません。また、収蔵品管理機能を他館から借り受けた資料情報の管理に利用しているケースもあります。

以下は、「博物館におけるIT活用の最新事情（平成24年10月弊社発行）」の再掲載です。

収蔵品管理システムが「管理」するのは「収蔵品」だけ？

当館は、収蔵品を持たない展示専用の施設です。よって収蔵品管理システムには縁がないと思っていましたが、「そうでもないよ」「むしろ、とても便利だよ」という話を耳にしました。いかがでしょうか？

収蔵品がなくても、収蔵品管理システムは効果を発揮します。博物館の収蔵資料（作品）データベースに用いられるシステムは、大量の資料を管理します。そのために、高度な検索機能やデータの一括登録機能、業務で使用するための柔軟な出力機能、一般に情報を発信するための公開機能などが搭載されています。これらの機能は、博物館における情報共有や情報の保管・継承、および業務の効率化や情報公開責任への対応などに貢献しています。

施設ごとに対象となる資料の性質、業務の流れが異なる博物館では、それぞれの館向けに機能をカスタマイズすることが一般的です。ここで言う「機能」には、収蔵品に直接関係しないものも少なくありません。

資料そのものの情報以外では、たとえば以下のような管理機能があります。

● 借受資料の情報管理

他館から資料（作品）を借りる際、輸送の保険や梱包の方法などに条件が課せられる場合があります。その資料に関する解説や文献情報なども発生しますが、収蔵品管理システムでは、こうした借受資料の付帯情報も一緒に蓄積しておくことができます。

何年か経って同じ資料を借りる時、また、過去の借受資料を統計的に分析して今後の展示の企画を練る時などに、こうした借受資料の情報蓄積はとても役立ちます。

● 展覧会の情報管理

収蔵品管理システムには、多くの場合、展示の情報を管理する機能があります。展覧会であれば、詳しい開催情報を登録し、そこで展示した資料（作品）をデータベースから抽出して「展覧会情報」としてまとめる…という流れでデータが登録されますが、展示した資料の一覧をExcel形式で出力する機能を持たせておけば、「出品リスト」をシステムで容易に作成できることとなります。

蓄積された展覧会の情報は、年報の作成時などに参照できる情報源となります。また、過去にどのような展示を行い、どこからどの資料を借りたか…といった情報を蓄積することは、以後の展覧会企画・準備にあたって重要な手掛かりとなるものです。

● 画像情報の管理

収蔵品管理システムに登録できる画像データは、資料（作品）自体を撮影した写真のみという印象をお持ちかもしれませんが、実は、収蔵品に関係ない画像も登録することが可能です。

弊社のカスタマイズ事例では、展覧会やイベントの開催風景の写真、館の外観や内観などの広報用写真など、さまざまな画像データを保管・共有するための器として活用されている例もあります。フォルダをたくさん作って手動で管理するより、はるかに正確で安全。巻頭特集のp 5～6もぜひご参考に。

● 蔵書情報の管理

博物館・美術館では、ライブラリコーナーを持っているケースがあります。収蔵品管理システムに図書管理機能が搭載されている場合は、館内の蔵書情報を一元管理することが可能となるので、問い合わせ対応や閲覧サービスの円滑化、学芸員の調査研究業務での活用も可能となります。

● 施設利用予約やホームページ

収蔵品管理システムの管理機能を拡張して、団体見学予約の受付や、ホールなど関連施設の利用状況の管理も可能です。また、ホームページ編集機能を載せるケースもあります。

このように、かなり広範囲な活用が可能ですので、「収蔵品管理」と言うより博物館専用の「業務支援」システムとお考えになれば分かりやすいかと思います。次のページをご覧ください。



クラウドか、個別導入か — 経済性が独自性が

導入形態は？

単独導入



自分専用なので、
大きな費用がかかる

サーバ管理は
自分の責任で

オーダーメイドで
「自分仕様」が実現

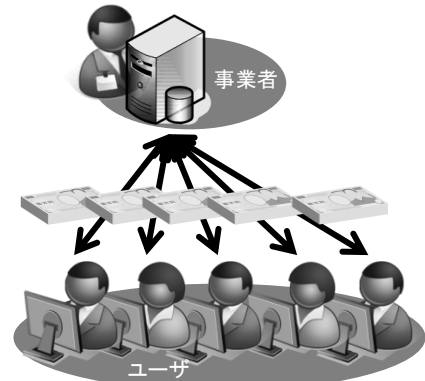
収藏品管理システムの導入形態

共同利用の割り勘効果で、
費用は格安

サーバ管理は
しなくてよい

共同利用なので、
自分仕様にならない

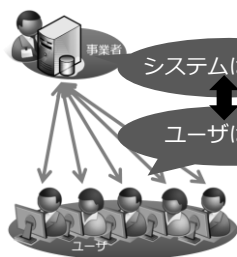
クラウド利用



博物館は施設によって扱うものが異なるため、システムも画一的なパッケージソフトでは対応が難しく、その施設に合わせたカスタマイズを行います。結果的にそれはオーダーメイドのシステムとなり、数百万円以上の費用がかかる原因となっていました。

一方、インターネット上のシステムを利用するというクラウドコンピューティングが浸透し、博物館でも検討が進んでいます。しかしながら、共同で利用するというクラウドコンピューティングの特性から、施設ごとの機能の独自性を持たせることができず、博物館にはクラウドコンピューティングは普及していないのが実情でした。

弊社では、過去の構築事例を基に分野ごとの「ひな形」をご用意し、「要る分だけ使う」というシステムを開発し、リリース後わずか1年で数十館に採用していただいています。



クラウドの欠点克服

美術も考古も同じシステム...
これでは、業務で使えない

ひな形を用意

美術用 考古用 歴史用 民俗用 ...

- 必要なものだけを利用できる。
- ひな形をさらに自分に合うように自由に変形（編集）できる。
- ひな型にないものも、ゼロから作ることができる。
- いつでも新たな分野を追加することができる。

➡ あらゆる機関で使える柔軟なシステムへ

クラウドが向くもの、向かないもの

借受資料情報の管理、展覧会情報の管理や、収藏品に関連のない画像データの管理などは、弊社のクラウド型収藏品管理システムにすでに搭載された機能です。また、2012年3月には、図書館システムに匹敵する図書管理機能が追加搭載されました。施設予約やホームページ管理は、クラウド型収藏品管理システムでは実現していません。団体利用予約やホームページなどは、要件をパターン化することが難しいからです。こうした機能が必要な場合は、現段階ではオーダーメイドのシステムを構築することになるでしょう。

資料データベースに限らず、館を運営していくにあたって、どんな情報を蓄積し、どんな情報を発信するかは大変重要であり、それは実は、収藏品を持つ館、持たない館に共通するものも少なくないのです。「収藏品を持つ館がやってきた収藏品以外の情報発信」があるとしたら、それは収藏品を持たない館にも有効なはず。そのような観点で、ミュージアムの情報発信をとらえ直してみたいかがでしようか。